鯉

豊島与志雄

五月末の或る晴れやかな日の午後四時頃、私は旧友N君と一緒に、帝国大学の中の大きな池の南側にある、小高いテラースの上の、藤棚の下の石のベンチに腰掛けていた。池の周囲には新緑の茂みが、むせ返るような明るい色に盛上っていたが、低い水の面は薄すらと黒ずんで、ひょろ長い四五本の松をのせた小島が、夢のように浮んでいた。N君は吸いかけの煙草をふいに投げ捨てて、変に憂鬱な表情をしながら、次のようなことを話しだした。——

この池を見るのは随分久しぶりだな。……こうして

じっと池の面を眺めていると、僕は変に憂鬱なお伽噺の世界に引き入れられるような気がするよ。

　え、憂鬱なお伽噺なんか僕にも似合わないって……。まあ聞き給え。僕は今まで誰にも話したことはないんだが、思い切って君にだけ、その憂鬱なお伽噺というのを聞かしてあげよう。

　学生時代のことなんだ。僕は或る気まぐれから、この池の中の鯉を一匹捕えてやろうと思い立った。何故にそして何のために捕えるのか、そんなことは僕自身にだって分らない。ただ一時の気まぐれに過ぎなかったんだね。

そこで僕は或る晩、用意しておいた道具をマントの下に忍ばして、この池の縁までやって来た。道具というのは、大きな釣針を畳糸でステッキの先に結びつけたもの、蚯蚓数匹、大きな竹の筒、風呂敷一枚、それだけなんだ。僕の考えでは、鯉を一匹釣り上げたら、それを竹の筒の中に入れて動かないようにし、上から風呂敷に包んで、門衛の眼をくらましながら、うまく持ち出すつもりだった。

丁度今頃のことだ。新緑の香の籠ってる夜気を吸いながら、僕はあの大木の下の岩の上に腰を下して、黒々とした池の中に釣糸を垂れたものなんだ。

一時間ばかりは何の手答えもなかった。僕はもう駄目かと思って、夜中禁制の釣をしてることが、変にばかばかしくなってきて、取止めもない空想に耽りだした。所が、ふいに……素敵だったよ、ばかに強くぐいと糸を引っ張るものがあるじゃないか。はっと思って、腰を浮かしざまに、力一杯引上げてやった……そいつが、夜目にはっきりとは分らないが、二尺ほどもあろうという大鯉で、水際を離れようという瀬戸際に、尾鰭で一跳ねやったために、僕は思わずよろよろとして、滑りかけた片足を宙に浮かしたまま、ステッキの釣竿を投り出し、両手で岩角につかまって、池に落っこち

ることだけは免れた。

　漸く我に返ってから、僕は釣竿の行方を探してみた。然し池の面は薄暗い闇に包まれて、さっぱり見当がつかない。僕は自分の失敗に苦笑しながら、竹筒と風呂敷とを抱えて、すごすごと帰っていった。図書館の窓が明々と輝いていたり、門衛が永遠の彫像のように控えていたりするのを、僕は横目にちらと見やりながら、変に薄ら寒い感じがした。

　その翌日、僕は制服制帽で何喰わぬ顔をして学校に出た。だがやはり気になって、池の方へ行ってみると、十人ばかりの学生が集っている。ステッキが動く、ス

テッキが動く……と云って不思議がってるのだ。見ると、なるほど、前晩僕が釣竿に用いた籐のステッキが、池のまん中に浮いて、前後左右に狂うがように動いている。時々静まるかと思うと、またぐいぐいと動きだす。……ははんと僕は思った。がどうにも仕様がなかった。

それから変な日が続いた。池の面にはいつも籐のステッキが浮いていて、それがどこかの隅にじっとしていることもあるし、あの小島のまわりをぐるぐる廻ってることもあるし、または前後左右に動き廻ってることもある。そのステッキの先の丈夫な畳糸には、大き

な釣針がついていて、それを鯉は腹の中までも呑み込んでるに違いないのだ。僕はそれを思うと、気持が苛立ってきて、しまいには神経衰弱にまでなりかかった。然し池の面はいつも静平で、水蓮の花が咲きかけてるし、緑の木影を映している。不思議なステッキも大して人の注意を惹かず、それを始終問題にしてるのは、恐らく僕と鯉とだけだったろう。

そのうちに、ステッキは水面に見えなくなってしまった。僕は夏の休暇に旅をした。凡てが時のうちに呑みこまれて忘れられた。

そしてその冬の或る寒い朝のことだ。池の面に氷が

はりつめて、スケートさえ出来そうに思えたので、僕は何気なく降りていって、氷の上を恐る恐る歩いてみた。すると、そこの岸辺の塵芥の中に、僕の例のステッキが転がっているのだ。氷を砕いて拾い上げると、浅い水底の泥の中から、ステッキについて畳糸がずるずる出て来て、その先に、泥まみれの魚の頭の骸骨がついている……。

僕はその骸骨を池の縁に埋めてやって、その上にステッキを立てて置いた。然しいつのまにか、その籐のステッキはなくなり、その場所さえも分らなくなってしまった。もう十年も前の話なんだ。然しこうして今

池を眺めていると、その水面に篠のステッキが浮んできて、それがあちらこちらに動きそうな気がするのだ。憂鬱なお伽噺の世界だね。

Ｎ君のその話を、私は今迄誰にも語らなかったが、ふと文字に書き残す気になったのである。大木の茂みとその間から隠見する文科大学のゴチックの横顔、そうした風致も地震のために壊されてしまって、あの古池と不調和な建物が周囲に立並ぶことだろうし、また、この話を聞いて面白く思いそうな、ハーン先生やケーベル先生のような人も、再び大学に現われそうにない

から、せめて文字に書き残しておくのである。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」未来社
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2006年4月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。